

2010年8月8日 川越教会

一步また一步と

[聖書]詩編 37 編 1～6、23～24 節

悪事を謀る者のことでいら立つな。不正を行う者をうらやむな。

彼らは草のように瞬く間に枯れる。青草のようにすぐにしおれる。

主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ。

主に自らをゆだねよ 主はあなたの心の願いをかなえてくださる。

あなたの道を主にまかせよ。信頼せよ、主は計らい

あなたの正しさを光のように

あなたのための裁きを 真昼の光のように輝かせてくださる。

主は人の一步一步を定め 御旨にかなう道を備えてくださる。

人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。

[序] 今年の前爆記念日

去る8月6日は、広島に原爆が投下された 65 周年記念日でした。明日は長崎の記念日です。アメリカのオバマ大統領が核兵器のない世界の実現を提唱し、核軍縮に積極的に取り組む姿勢を表明して、昨年ノーベル平和賞を受賞しました。それを受けて、今年の前爆の記念式典には、国連の潘事務総長とアメリカのルース駐日大使が出席しました。

核兵器廃絶に向っての前爆・長崎の訴えがようやく世界主要国の動きになってきたようです。65年——肉親を失い、今なお後遺症に苦しむ方々にとっては何と長い道のりだったことでしょうか。1955年8月6日に第一回原水爆禁止世界大会が広島で開かれ、1961年には国連総会で核兵器使用禁止決議がされてからでも、半世紀が経ちます。ねばり強く核兵器の廃絶を訴えてきた方々の労苦に、深い敬意を覚えます。

でも核兵器は人類とこの世界を破滅させる絶対悪だという恐怖を、私たちはどれほど自覚したでしょうか。アメリカでは広島に原爆を投下した爆撃機の機長の遺族が、「大使の出席でアメリカは謝罪したのか」と厳重な反対抗議をしたと報道されています。

「原爆のおかげで日本が早く降伏し、大勢の人の命が死なずに済んだのだ」という正当性が、未だに叫ばれています。核兵器を保有することによって自国の有利性を確保しようとする動きも止みません。

世界の平和を求めて、核兵器の廃絶を求める働きは、まだ道半ばにも達していません。果たして悲願を達成できるのでしょうか。

[1] 原爆の図のエピソード

川越の近く東松山には丸木位里・俊夫妻の原爆の図を保存する丸木美術館があります。丸木さんは実家のある広島が新型爆弾で大変な被害にあったと聞き、直ぐに駆けつけ、すさまじい廃墟と悲惨な被害者の有様を目の当たりにしました。神奈川に帰ると、脳裏に焼き付けられた地獄のような光景を、お二人の共同制作で連作の絵に画きました。そしてそれが人類初めての原子爆弾によると分かった時、原爆の図を仕上げ、世界各地で展覧会を開いて、原爆の恐ろしさと平和の大切さを訴えたのでした。

アメリカで展覧会を開いた時のことです。「原爆のおかげで日本は早く降伏した。そして大勢の人の命が死なずに済んだのだ」「自分の息子は捕虜になり、戦争が終る直前に広島で殺された」「中国人の画家が日本にやって来て、南京虐殺の絵の展覧会を日本で開いたら、あなた方はどんな気持がしますか」等といわれました。

日本に帰ってきて調べてみると、広島師団司令部の地下室に監禁されていた 23 人のアメリカ軍航空兵の捕虜が、8月6日の後で、日本軍将校に命令された市民たちのよって、竹槍で突き殺されていました。また中国各地では日本兵が市民を無数に虐殺していたことも、分かってきました。南京では 30 万人余が殺されたと言われています。そういえば在日朝鮮人の死体だけが、何時までも川原に野積みになって、からすの餌食になっていた有様も思い出されました。

丸木夫妻は「どうしてこんなにひどい事をしたのか」という怨みが、自分たちの心の底にあったことに気付かされ、「目からうろこの落ちる思いがした」と語っています。そして「23 人の外国人捕虜の図」「からす」「南京」「水俣」「沖縄」と、新しい連作の絵を、次々と生み出していったのでした。

東京でアジアの婦人平和会議が開かれた時、各国からの代表たちが、この丸木美術館を訪れました。丸木俊さんが一枚一枚の絵を説明しながら、お詫びを繰り返しました。「私たちは何という恐ろしいことをしてしまったのでしょうか。これらは私たちのしたことの、ほんの一部なのです。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

「からす」の絵の前で韓国代表の婦人が突然、声を上げて泣き出しました。「日本人の中に、このような絵を画いてくれる人が一人でもいる限り、私たちは日本人と手を組んで、平和のために労することが出来ます」

この様子をじっと見ていたマレーシア代表の婦人が、涙を流しながら口を開きました。彼女は会議の間中、人を寄せつけない冷たさを漂わせていた人です。「私も今、私を長い間縛りつけていた怨みから、解き放たれました。有難うございます」。そして丸木さんに握手の手を差しのべました。彼女は新婚間もない夫を、日本兵の拷問によって、廃人にされていたのでした。

[2] いら立つな

今日の詩編 37 編の詩は、「悪事を謀る者のことでいら立つな。不正を行う者をうらやむな」という言葉で始まります。口語訳では「心を悩ませるな」、新改訳では「腹を立てるな」と訳されています。いらいらする・やきもきする。今の若い人ならムカツクでしょうか。7節、8節にも繰返されています。「繁栄の道を行く者や、悪だくみをする者のことでいら立つな」「自分も悪事を謀ろうと、いら立ってはならない」

日本にはこんな諺があります。「正直の頭(こうべ)に神宿る」。正直な人には必ず神の加護があるという教えです。しかし一方では、「正直者が馬鹿を見る」「正直貧乏・横着栄耀(えいよう)」と、正直者は嘘が言えないので損をして貧乏なのに、ずる賢くて要領よく立ち回る者が、大きく栄えると言われています。

そして正直であることを励ます諺よりも、正直は損だとする諺の方が多いのです。これがこの世の現実の反映でしょう。しかしこの詩の作者は申します。「悪だくみをする者のことでいら立つな、怒りを解き、憤りを捨てよ。自分も悪事を謀ろうと、いら立ってはならない」(7～8節)。何故でしょうか。

「彼らは草のように瞬く間に枯れる」(2節)、「悪事を謀る者は断たれる」(9節)、「しばらくすれば、主に逆らう者は消え去る」(10 節)からです。また「主は計らい、あなたの正しさを光のように、あなたのための裁きを、真昼の光のように輝かせてくださる」(6節)からです。神さまは悪事を謀る者を、必ず取り除いてしまわれる。また正しく生きようとする者の正しさを、必ず明らかにしてくださるからです。

しかし悪を謀る者たちが、草のように瞬く間に枯れるのでしょうか。しばらくすれば、消え去るのでしょうか。それどころが、いつまでも悪がのさばり、人々を苦しめ続けています。正しい者の正しさが評価されず、不正な裁きが大手を振っています。だからと言って、不正・不義を打ち伏せるために、自分も暴力・破壊・殺人等の悪事を謀れば、社会の混乱は益々大きくなり、更に多くの人々を不幸にしていけばかりです。戦争や自爆テロでは、決して平和はもたらされません。

そこでこの詩は、繰り返しいら立つなと歌います。「沈黙して主に向い、主を待ち焦がれよ」(7節)と言います。自分の思いのままに行動を起こさないように、怒りと憤りを捨て、神さまの前に静まって祈りを注ぎ、神さまに聞き従う信仰を整えよと呼びかけています。

いら立たず、自分も悪事をしないと心に定めた上で、「主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ」(3節)。「主に信頼する」が「主に自らをゆだねよ」(4節)と言い直されています。「ゆだねる」は「喜ぶ」の意味を持つ言葉です。そこで4節を、口語訳は「主によって喜びをなせ」、新改訳は「主をおのれの喜びとせよ」と訳しています。主に信頼するとは、主の言葉に従って生きることによって、喜びを得ていく生き方が言われているのです。

「主に自らをゆだねよ。主はあなたの心の願いをかなえてくださる。」(4節)。 神さまを主と呼ぶ

時、神さまは私の主人で、私は聞き従う僕です。神さまを信じて、我が身を委ねるならば、神さまは私の心の願いを必ずかなえて下さるのです。主を信頼して、我が身を委ね、主からいただく一つ一つを、恵みとして喜びながら生きていこうという呼びかけが「主によって喜びをなせ」とか「主をおのれの喜びとせよ」と言われているのです。

「主に望みをおく人は、地を継ぐ」(9節)。「貧しい人は地を継ぎ、豊かな平和に自らをゆだねるであろう」(11 節)。イエス・キリストはおっしゃいました。「柔和な人々は幸いである。その人たちは、地を受継ぐ」(マタイ 5:5)。「人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる」(24 節)のです。主に望みを置くが故に、また貧しいが故に、悪に打ち倒されることがあったとしても、主はその人の手をしっかりとつかんでいて下さいますから、その人は決して滅びることはないのです。豊かな平和をいただけるのです。なんと嬉しいことでしょうか。

「主に信頼し、善を行え。この地に住み着き、信仰を糧とせよ」。糧とするとは牧草を食べるという動詞です。羊飼いに守られて良い牧草で養われる羊の群れ——私たちが神さまに守られ、導かれて豊かな平和を実現していけるのです。

[結] 一步また一步と

「主は人の一步一步を定め 御旨にかなう道を備えてくださる」(23 節)。私はこの一步一步という言葉が大好きです。教団賛美歌 288 はこう歌っています。「ゆくすえ遠く見るを願わじ 主よ我が弱き足を守りて ひとあし またひとあし 道をば示したまえ」。そうです。何時・何処でどう死ぬかまで、知る必要はないのです。知らされてしまったら、かえってそれに縛られて気持ちがちじこまり、身動き出来なくなってしまうでしょう。だから正しい道が一步また一步と示されればよいのです。神さまがよしとされる道、そして私にとって一番良い道が備えられているのですから。

丸木さん夫妻は、身内を救出するために広島に行き、人類が始めて経験した原爆の悲惨さに直面しました。脳裏に焼きついた地獄のような悲惨さを、絵描きとして書き残さなければと思いました。その絵を見た人が、誇張し過ぎていると言いました。ところが広島の人たちは、もっとひどかったと言いました。そこで自分たちの見たままを間違いなく描き切ろうと全力を傾けて画き続けました。

そして日本の各地、世界の各地を巡って、多くの人々に観てもらいました。人との出会いから、更に視野が広げられ、課題が与えられました。「どうしてこんなことをしたのか」という怨みが、「私たちは何という恐ろしいことをしてしまったのでしょうか。これらは私たちのしたこと、ほんの一部なのです。ごめんなさい。本当にごめんなさい」という言葉になりました。こうして一步また一步と平和を願う多くの人の共感と友情を得ていったのでした。

核兵器は人類を滅ぼす恐ろしい兵器です。益になることなど一つもありません。その絶対悪を人間は作り出してしまったのです。そしてそれを手にして、自分の国の益に用いようと謀る者がうごめいています。核兵器廃絶の悲願も、一步また一步と不断の努力をもって進められて行かなければ

なりません。

「主に望みをおき、主の道を守れ。主はあなたを高く上げて、地を継がせてくださる」(34 節)。「無垢であろうと務め、まっすぐに見ようとせよ。平和な人には未来がある」(37 節)。神さまは、平和な人には未来があると約束して下さっているのです。

「主は人の一步一步を定め、御旨にかなう道を備えてくださる」という言葉を信じて、いら立たずに、進んで参りましょう。